

## 卒業生のネットワークづくり：福祉研究室の役割

著者	本間 真宏, 三角 同, 保延 成子
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	37
ページ	165-173
発行年	1997
出版者	東京家政大学
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1653/00008975/">http://id.nii.ac.jp/1653/00008975/</a>

## 卒業生のネットワークづくり —福祉研究室の役割—

本間 真宏, 三角 同, 保延 成子

(平成8年9月30日受理)

### Organizing of the Graduate Network — the Role of Institute of Social Welfare —

Masahiro HONMA, Hitoshi MISUMI, and Shigeko HONOBE

(Received September 30, 1996)

#### はじめに

個々の人間に関わる生理学や心理学のような学問に対して社会学が相対的自立性を持つのは、結局のところ、多くの人々の行為の相互依存関係とネットワーク形成から生じる過程の構造が、行為する諸個人に対して相対的自立性を持つためである<sup>(1)</sup>。

私たちは、これまで次のような共同研究<sup>(2)</sup>のなかで多くの卒業生と関わり合いをもってきた。また主に関東周辺の保育者養成校の先生たちとの研究会活動を行ってきた。それらの成果は、いわば研究室の活動のほとんどを占めているものであるといえよう<sup>(3)</sup>。これらをベースとして、私たちは「研究室を中心とした卒業生のネットワークづくり」というテーマに取り組んでみようということになった。そのキッカケは直接的にはキャンパス整備の都合による研究室の移転ということであった。

さて福祉資料室には多くの資料が余り整理もされずに蓄積、保管されていた。その散逸を防止するためにも何らかのまとめをしておかなくてはならないということもあった。ところで研究室の仕事とはいうまでもなく在学している学生の教育であり就職指導である。私たちはそれだけでいいのか、生涯教育ということがいわれるのは何故なのかを考えてみた時、研究室としてできることは何なのかを話し合ってきたのである。そして研究室と卒業生とを結びつけるものとしての雑誌を作ろうということとなった。

私たちはまず学園内で刊行されているものについて調べてみた。14種類ほどが各部門から出されているということであった(本学企画調査室による)。それらとの重複を避けながら、研究室独自のものを作るとすればどのような内容になるかは自明のこととなろう。まず今までの卒論を整理すること、そして現在の住所を明らかにすることである。次いで平成4年度の卒論生のテーマとその要約を載せることにした<sup>(4)</sup>。さらに共同研究者のひとり(本間)が担当している短大の「社会福祉演習」のグループ研究のテーマだけでも示しておこうということであった。また、さしあたって現在、講義をお願いしている非常勤の先生方にも何か書いてもらおうということになった(今後の課題としては、これまで研究室としてお世話になったかたがたにも何か書いてもらうことであろう)。こうして創刊号をこれまでの卒業生140名に送付したところ、所在不明に戻ってきたもの10通、実に71.4%の把握率ということであった。それに私たちは妙な感動を覚えたのであった。

返事がきたなかから、いくつかを紹介してみることにしたい。

#### やったこと — (1) —

(1)このたびは「TKUジャーナル」の創刊おめでとうございます。わざわざ海外にまでお送りいただきありがとうございます。興味深く読ませていただいております。家政大の風景や行事も思い出され本当に懐かしいです。学生はどんどん卒業していくのに、引き続き同じことに関心を抱き、さらにテーマを掘り下げて

いけるのが楽しいですね（中略）。

(⇒)3月に「TKUジャーナル」をお送りいただき、どうもありがとうございました。卒業して約20年になることに驚き、また後輩がこのようにたくさんいることに親しみを感じました。卒論の内容も時代とともに変化していることがよくわかりますね。

20年前の施設実習の心細かったことなど、いろいろと思い出されて懐かしく思いました。本間先生について語っているところなど「私たちの頃も、そうー同じ!」とつい読みながら相槌をうち微笑んでしまいました（中略）。

(ハ)「TKUジャーナル」をお送り頂きありがとうございました。1ページ1ページ読み進めるにつれ、私の知らない先輩そして後輩のかたがたと、こうした形でつながれることにうれしさがこみあげてきました。（中略）学生時代の時を含め10年の歳月を過ごした家政大を離れた今、その頃とはだいぶ異なる生活をする中でも、フッと想いを寄せられる場を研究室に見出せることは幸せに思うのです。たとえ時代の流れで変わるものがあっても……。

(ニ)TKUジャーナルの創刊号、ご送付いただきありがとうございます。えーこんなリッチなものができたの!?!という感じでドタバタ走りまわるムスコを横目に、夕食のおかずのナベをかきまぜながら片手で立ち読み（失礼!）しています。

あー卒業してからずいぶんたったなあ。4月で私は30になり、ムスコは早くも2歳です。在学中は愛校精神(!?)なんて全然なかったのに、卒業してみるとなんかつかしい、フシギなものです。あの頃はずいぶんツッパって生きてたなあ、なんてとにかくちょっとうれしかったです。

主婦になって、母になって、ホントに忙しくめまぐるしく毎日が過ぎてしまいましたが、ムスコがやっと日本語らしいものをしゃべり、人間になってきて、4年間学んだことを思い出す余裕が出てきました。でも……教科書に書いてあったことってやっぱりうそー!

母になり「会社」という組織からものはなれ、私は世間の流れにのりおくれた気分。今生きている社会は子ども中心のせまいせまい社会、そして思うことは（昔とあんまり変わってないけど）同じ世代のお母さんた

ちの自立心のなさ……。まるで女子校生のようにつるんで、仲良しグループでしか行動できない、“サークル”とかやたら閉鎖的なモノをつくりたがる。1歳児なんて、その日その場所で会った子と、てきとーに中良くできればいいじゃんーと思ってる私はやっぱりヘンでしょうか。私は私でなく、「照井さんの奥さん」で「雄太くんのお母さん」—あぁ、どんどんバカになってゆく……。今のユメ、ひたすら「学生になりたい」です。学生は良かった。

文章を書くことだけはつづけようと、育児日記は欠かさず1年10ヵ月、ワープロ原稿（これも育児日記に近いモノ）も200枚近くなりました。

仕事で使ってたパソコン、ワープロ、プリンターが遊んでいます。何かご協力できることありましたらいつでも……。 (本間先生、自伝でも書く時はお手伝いさせてねっ!) (中略)

P.S. ところで送料とかどうやってまかなっているんですかー心配……。

やったこと—(2)—

第2号は平成7(1995)年3月に刊行することができた。この号にも卒論生全員の概略と短大演習グループ研究のメンバーとテーマをのせた。とともに20年前、共同研究者のひとり(本間)が卒論指導を担当した4名の「いままで」について掲載することができた。そのうちの二人は次のように書いていた。

(イ)本間先生より、卒業後のこれまでのことを報告してくれないかとのお話を頂きまして、思い出せるのかと心配でしたが、浅い記憶の中から書いてみようかなと思いました。

お手紙を頂いたとき、毎日を忙しく過ごしている中で、あの懐かしい学生生活と友達の顔が浮かんできました。今頃どうしているのかな、会いたいなと思った次第です。家政大学で、過ごした4年間は、私にとって、とても貴重な日々でした。

さて、前置きはこの位にして本題に入りたいと思います。卒業後は、幼稚園教諭として、私立の幼稚園に勤めました。最初に年長組を受け持ちました。学生と社会人としては、責任の重さに大変な違いがあり、慣れるまでそのギャップが大変でした。辛い事、失敗などたくさんありましたが、子ども達とのふれあいは、本

当に楽しいものでした。今日は、子ども達とゲームをしましようとか、明日は、制作をやりましようとか毎日、張り切って夢中で1年間が過ぎていきました。

そして、初めて送り出す、卒園式を控えて、あいさつをあれこれ考えていたのに、本番では涙で声がつまってしまうて、あいさつどころではなかったということも懐かしい思い出となっています。2年目になりますと、大体1年間の流れがわかりますので、少し余裕をもって保育に当たられたように思います。

運動会の時、自己管理が悪かったために40度の熱が出て何をやったのか、全然覚えていないという年もありました。そして、その幼稚園に4年間お世話になりました。その後、縁あって結婚致しまして、主人と幼稚園をやっております。

園児減少と言われている現在ですが、うちの幼稚園はお陰様で、今のところは、現状維持でやっておりますので、ありがたいと思っております。家政大出身の先生たちも数人おり、みんな頑張っています。私も、クラスこそ持っていませんが、毎日子ども達となわとび、鉄棒などをしながら過ごしております。お陰様で気持ちだけは若いようです。

また大学では福祉を専攻しましたので、施設での実習、そしてボランティアとしても色々な施設に行き学ばせていただきました。これらの事が、日常生活の中や健常児に接する時大変、役に立っています。これからも園児たちとの触れ合いの中で、その大切さやちょっとした心遣いは伝えていくつもりであります。

どうぞ、皆様もお身体に気をつけて、家政大で学んだ事を活用していかれるよう期待しています。

(a)「資格を取ってずっと働こう。」と決め東京家政大学に入学して、たくさんの友達に恵まれて、一生懸命勉強に励むことができました。そして卒業して、はや20年がたち、気づいてみますと、ただの主婦。

私は、千葉市の保育所に4年勤務しました。その間に、何度か研修や勉強会があり、参考になりました。やはり学校とは違ったこの研修会などは勉強にもなり、励みにもなり良かったと思います。中でも長野県で全国の保母が集まり、体験談などを聞く機会があったことなども貴重なことでした。4年間の間に転勤が一度あり、せっかく慣れてきた保育所と離れなければならぬと思うととても淋しいと感じ残念にも思いました。

若い頃は、それなりに一生懸命やってきましたが、結婚を機会に専業主婦に挑戦してみようと思退職しました。そして現在、子育てにも何となくゆとりができて、もう一度勤めたいと思い、保育関係のところに問い合わせますと、なんと25歳までの年齢制限があり、また、私が学んだころ、教育要領は6領域でしたのに、今では5領域になっていました。時代も随分と変わったものです。時代とともに自分の学んだ分野も進化していることに気がつきました。

子どもの人口が減ってきました。私たちのまわりも老人が増えてきました。今度は、老人福祉も考えなければいけない時代と感じました。

さらに返事のあったなかから、いくつかを紹介しておくことにしたい。

(i)家政大を卒業して18年になります。何年過ぎたのかということすら忘れておりました。先日「TKUジャーナル」の創刊号と2号を受けとり、その年月の重さを感じしみとかみしめています。新しい住所もお知らせせず申し訳ありませんでした。私は今アメリカのコネチカット州に住んでおり、実家の母が転送してくれました。

18年もたっているのにちゃんと私の名前も忘れずに記されていることに感動してしまいました。あの頃の記憶が鮮明によみがえります。「今までの記録」は今年中に、とありましたのでもう少しじっくり考え振り返りながら書いてみたいと思います。自分自身の歩いてきた道をふりかえてみるのもいいことではないかと思ひます。

(ii)桜も満開に近く春の息吹を感じる頃になりましたが、先生方はいかがお過ごしでしょうか。

今年もジャーナル誌を送っていただきありがとうございます。福祉という不変のテーマに様々な角度からアプローチしていることに感心致しました。個人的にはメンタルフレンドに興味を持ち、またエイズの問題は私達の在学中には考えられなかった新たなテーマだと思ひました。福祉というのは人間学とでも言っているのかもしれませんが、これに取り組む学生さん達がより深い経験をして、挫折や苦しみも乗り越えて「心」のある人になってほしいと願ひます。

私は、卒業後しばらくたってから保育園に勤めました。偶然、保母になり4年間働きましたが、喜怒哀楽、矛盾、人間の裏表、その他数え切れないほどの貴重な経験をしました。それらのものは自分の土台になっています。現在は山梨大学の工学部の研究室事務をしておりますが、全く違った仕事をしていても社会福祉にはやはり興味があり、関係ある本などは読んでいます。最近ではホスピスに関心があります。

ところで、大学では環境学科に所属しているのですが工学部なのでほとんどが男子学生です。留年、卒業延期の危機を抱えた学生が今年も研究室にやってきました。私の所は実験系なので計画通りにいくとは限らず、追い込みの時期になると実験室に寝袋を持ち込んでカップラーメンとリポビタンDで戦っているようです。それにしても先生方も大変なことと思います。本間先生も赤ペンでよく添削をされていましたが、卒論完成までの道のりは山と谷ばかりのようだと思えます。あらためてありがとうございます。

研究室のますますの御発展をお祈りいたします。

また、この年には昭和53(1978)年に短大保育科Dクラス(担当は本間)を卒業した学生たちの「その後」についての文集「花も嵐もふみこえて—乙女たちの今!」を作成した。いくつか紹介してみたい。

(イ)短大を卒業して15年、「あつというまにこんなに月日がたってしまった」というのが実感です。この間、就職、結婚、出産、子育てと次々に今まで経験したことのない事が私にも訪れました。色々な事が思い出されるのに、いざ文章で書くとなるとなかなかまとまりません。3年生の次男がやってきて「お母さん何してるの?」私が「作文の宿題をやるの」というと「題は考えたの?何を書くか決めた?早く書いてあげばいいのに……」と。

(ロ)平成5年4月、長男が小学2年生スタートの日、担任が変わり新しい先生が来るので、親子で入学式の日ほどではないが、なんとなく期待と不安が半々の日でした。始業式を終えて帰ってきた息子に「どう?新しい先生。」「わかんない。」(そりゃそーだ。)と思いつつながら、自己紹介のおたよりを読んでみると、おもしろ目がテン!になりました。『東京家政大学を卒業』の

文面に、うっそうと茂る木々、湿ったにおいのするピアノ練習室、絶え間なく遮断機の音が聞こえる十条の駅等々、十数年前の風景が頭の中を、よこぎりしました。

家事・育児に追われ、年に1度の同級会の通知も、遠方と子どもが小さいことを理由に、横目で見て過ごしてきてしまっていました。学生時代のあの2年間は、何か、もう遠い昔の幻のように思われ、毎日の生活の中ですっかり忘れ去っていました。

新しい先生(えっちゃん先生といいます!)と始めて個人的に話をした家庭訪問の時は、すっかり家政大談議に花が咲きました。校舎等々大きく変わった様子を驚き、年月を感じながらも、先生方のお名前や特徴が一致すると嬉しくホッとしたりしました。

今では息子も3年生になり、えっちゃん先生に担任をして頂き2年近くたちます。お陰様で、毎日楽しく生き生きと通学しています(このまま成長して欲しくて願わずにはいられません)。度々くるクラスだよりも、えっちゃん先生のやる気と愛情がにじみ出ています。そして、そんな姿にふれるたびに、私も刺激され、がんばろうという気持ちになります。

“たかが2年間、されど2年間”レポートとピアノと実習に追われた日々でしたが、新しい経験や考えを、どンドン吸収できた貴重な日々でした。これからも、これらの日々を大切に、有意義に年を重ねていきたいと思えます。

最後に、本間先生と同級生の皆様の御健康と御活躍をお祈りいたします。

(イ)卒業後15年たって、記念の小冊子を作るということで、皆の原稿を集める係になった私。この数ヶ月、ポストをのぞくのがとても楽しみでした。役得で、誰よりも先に原稿を読ませてもらいました。その度に、元気になり、考えさせられ、羨ましく思いました。そして、自分の原稿が書けなくなりました。みんな書かれてしまったような、まねになってしまうような、そして、自分がどうしたいのか、今まで何を考えて生きてきたのか。振り返ることができない程忙しくはなかったけど、胸を張って書けるような事もなく。

20歳の頃を思い出してみましょう。その頃は確かに、不満もあり、悲しみもやるせなさもありました。今よりも、もしかしたら、いい確かに数倍も感じていたように思えます。でも、あんな自由な時はなかったと

思います。時間的にも、経済的にも。

月日が流れて私は、自分の気持ちをコントロールすることが上手になりました。何事も手を抜く事は簡単だし、言い訳しながら自分を納得させてきました。でも、時々、それではいけない、と気付かせてくれる友がいます。感動させてくれる人がいます。あーなりたい、素直に思わせてくれる人に会うことがあります。私もまだまだ捨てたものじゃないぞ、と思います。そして、そこで止まらず、先へ一歩踏み出して行きたい。自然体でありながら進歩していきたい。無理はしたくないような、したいような。

最後にひとつ、胸を張って自慢できること。短大時代を含め、この17年間、クラス会全出席。そうできた環境、協力してくれた家族に感謝(娘は2ヵ月でクラス会に参加)、友に感謝。どうもありがとう。

(=)保母として社会人の第一歩を踏み、あらゆる現実の厳しさをかみしめながら昔者の私は、「花も嵐も踏み越えてー」と勇気づけてきた。

しかし、実際は大きい石が目の前にころがるとすうとかわして、目上の人が黒だと言うと、白に見えても黒に見えてくる情けないもの。「カメレオンのような性格」「自信がない」と自分をせめてみたり、何だか人のやる事がくやしかったり、肩に力を入れ身構えていた20代だった。

やがて、結婚。母になる。

「くよくよしても、成るように成るだけ。」という心境になる。けっして、あきらめているのではない。自分のやるべき事に誠意を示せば、それでよしと自然体になれた。

最近では、保母を続けて良かったと思う。子どもとすぞすということ、理論や理屈ましてや技術でもない。自分の目の前の子どもを母の気持ちでみつめること、愛することだ。15年の月日の流れの中で、原点のようなものにいきつく。もう、こうなったら体が続く限り保母はやめない。子どもの純粋な心のエネルギーを元氣いっぱい吸い込んでいつも輝いていた。

最後にひと言、どうしても家政大の実習生は欲目でもてしまう私です。

あつという間に過ぎてしまった2年間だったけれど、理解ある本間先生、そして、ゆかいな仲間とめぐり逢え最高だった。このあたたかい輪を大切にしたい。

ここで昭和51年度からはじまる卒業生について、彼女らを取りまく社会の変化について考えてみることにしたい。あの「女子大生亡国論」が出されたのは1962(S37)年であった。共同研究者の一人(本間)が短大保育科に勤務したのが昭和42年4月、以後、女子学生の進学率は急激に伸びてきた。総理府がまとめた「女性の現状と施策<sup>(5)</sup>」によると、平成6年5月1日現在、大学で31.3%、短大では91.8%を女子が占めているという状況である。さらに、平成元年度からは女子の進学率が男子のそれを上回っており、男女間の差は年々縮小傾向にある、と指摘しているのである。そのきざしが、さきの彼女たちの年代だったように思われる。

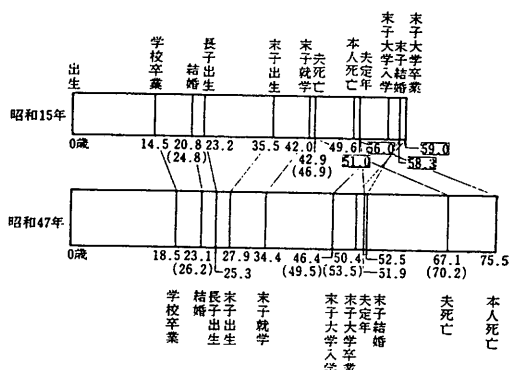
ここで、いわゆる「主婦論争」についてみておくことにしたい。上野千鶴子は「主婦論争を読む<sup>(6)</sup>」をまとめながら、次のような時期分類をしている。

まず、「第一次主婦論争」としては1955(S30)年頃からはじまっていること、今、読み返してみても、主婦を取り巻く状況が根本的に変化していないこと、主婦に関する論点が、この時に、ほとんど出つくしている、といっている。そして60年代のそれを第二次主婦論争、70年代のはじめのものを第三次のそれとして分類している。

また「ジェンダーの日本史(下)<sup>(7)</sup>」における論文では次のようにまとめている。彼女は「女子学生亡国論が出るなど、戦後混乱期を終えて、女性の労働市場からの排除の進行、イコール、女性の主婦化の進行」として60年代をとらえている。すなわち「結婚すれば主婦」という常識が支配した主婦化の時代であったとまでいっている。はたして、そうなのであろうか。さきの「亡国論」とは別に、今や高等教育を支えているのは女性たちであるといっても過言ではないと思われるのである。

しかし、それは、大分偏った分野に集中していること、すなわち文化系、家政系へのそれであることをいわなくてはならない。さきに彼女たちの卒業したのが昭和51(1976)年3月からであるといった。以後、私達は今日まで20年、多くの卒業生を送り出してきた。ちなみに、その前年は「国際婦人年」であった。そして国連婦人の10年間となる。「厚生白書51年版<sup>(8)</sup>」はそのサブタイトルを「婦人と社会保障」としていた。

そこではまず婦人の生活周期(ライフサイクル)について昭和15年と47年とを比較し図示している。



資料：総理府統計局「国勢調査報告」、文部省「学校基本調査」、内閣統計局「第6回生命表」、厚生省統計情報部「昭和47年簡易生命表」、厚生省人口問題研究所「出産力調査」

(注) 1 □は死亡後、( )内は夫の年齢  
 2 死亡は0歳の平均余命、末子結婚は男女平均の数字  
 3 夫の定年年齢は55歳とした。

この図から白書は次のようにいう。「30年代後半には育児から解放され、時間的にかなりゆとりのある中年期を迎えることになる。……末子どもが結婚し家庭を出た後は夫と2人で15年近く生活する期間があり、また、夫の死亡の後、更に死ぬまで8年間過ごす」。そして婦人に関連する社会保障として次の事項があげられている。

- (1)妊娠、出産をはじめとする母性の保護のため母子保健策の重要性
- (2)育児負担の軽減としての保育所など
- (3)母子世帯の援護 経済的自立、措置
- (4)老後の保障 所得保障、医療保障、社会福祉サービスの有機的連携
- (5)社会保障を担う人々の問題 看護婦、保母、家庭奉仕員などの確保と待遇改善 (P. 7)

これらが今日、どうであるか。そのあとをたどてみるのが次の課題である。

やったこと—(3)—

さて「TKUジャーナル」第3号は平成8(1996)年3月に刊行、送付した。返事のあったなかから、例のようにいくつか紹介してみたい。

(1)TKUジャーナル3号を送って下さりありがとうございます。卒業してから、今までのことまとめてみようかと心にとめてはいたのですが、この18年間実にいろいろなことがあり、なかなか文章にまとめられず、

日々の雑事に追われてしまいました。佐藤薫恵さん(旧姓恩弊)の文章を読み、子供たちのために今なお情熱をそそぎ頑張っている彼女に頭が下がる思いです。

アメリカに来て、2年が過ぎました。娘が中3息子が中2です。小学校4年生の時不登校で1年間学校に行くことのできなかった息子もアメリカに来てからは、あの頃のことをウソのように楽しい学校生活を送っています。1年間親子で苦しい時期をのり越えたことが、大きな力となっているように思います。私にとっても今までの人生の中であんなにつらかったことはありませんでした。そのことがきっかけとなり、同じような悩みを抱えている人たちの力になればとカウンセラー養成講座を受け始め、初級から中級コースへ進んだ時アメリカへ転勤となってしまいました。しかたのない事とは言え、夫の転勤の度に私の生活は中断され、何もかもが中途半端に終わってしまいます。でも日本に帰ったらカウンセラーになるための勉強を再開して、何年かかっても心に悩みを持つ人たちの話を聴き共感できる人になりたい—というのが今の私の夢です。(中略)

帰国したら卒業以来ご無沙汰している家政大を是非訪問してみたいと思っています。

(2)この度は「TKUジャーナル」を送って頂き、ありがとうございます。前回頂いたときにはお礼のお便りも差し上げず大変失礼いたしました。拝見させていただきました。学生の皆さんのとても素直な感性が伝わってくる内容でした。短い学生生活のなかで皆さん一人一人が感じたものがこれから大人になっていく過程でどんなふうに関わり、成長していくか将来がたのしみでもありますね。

卒業いたしました15年…(なんと!)

月日の経つのがこんなにも早いとは、わたしの髪の中にもぼつぼつと白いものが混ざってきております。わたしは児童学科の学生としては、今思い出しても赤面するような、なさけない学生生活でしたが、家政大で過ごした4年間はこんな大人になるきっかけをつくった大切な大切な財産となっています。やりたい事に対して感じるままに行動し、考え、思う存分発散した、責任の取り方も知らない…だからこそ、強かった。(いまでも恐いとか、強いとかいわれますが。)いい出会いをたくさんしたように思います。

卒業してから現在までずっと経理事務員として働き、山あり谷あり、特に結婚してからは、「共働き夫婦・老親介護（義理の母は2級特別障害者、しかも無年金の夫婦）・出産・育児」と現在話題になっている家庭問題を一気に抱え込み、ずっとがけっぶちに爪先で立っているような毎日を送っていましたが、それも一昨年の暮れに終わりました。夫の両親との同居生活は、いまでこそすばらしい思い出にもなり得ると思える程度になりましたが、ほんとうにいろいろな試練を私たち夫婦に与え続けました。今あらためて自分たちが結婚した年頃（24才）の男女をみると「自分たちってこんなに子供だったのに、全部背負いこんでいたんだな。無理ないな。限界越えてたよ、とっくの昔に。」と、何だか自分で自分達夫婦のことがとても愛しくなるような充実感でいっぱいになります。あんなに望んで産んだ4才になる娘にいちばんしわよせがいつってしまった気がしてなりません、それももう終わり。貯金も一時は底をつき、絶望のどん底に突き落とされましたが、今はずっと目標にしていたマンションを購入し、両親の死後半年後に住み慣れた都営住宅より転居しました。都営住宅時代は、自治会をはじめとする近所の方々や訪問看護婦さん、ヘルパーさん、かかりつけのお医者さん等本当にたくさんのかたがたの善意に支えられ、ここでもとてもいい出会いがありました。（中略）

いろいろあったけれど卒業してからも善き人たちに出会えてなかなかしあわせな毎日を送っています。次の「TKUジャーナル」楽しみにしております。ありがとうございます。

(ハ)TKUジャーナルをご送付いただきありがとうございました。卒業してから9年がたちましたが、その間ずっと感じてきたことは学生時代に、もっと勉強しておけばよかったということです。この冊子を手にとり、めくっているとあっというまにその思いが強くなります。

職場で本間先生にお会いした時（先生は福祉事務所の実習の件でお見えになっていたのですが）、先生の第一声は「細田、お前こんなところで何してるんだ」でした。本当にびっくりされていたと思います。その時、私は就職先を先生に報告していなかったことに気がつきました。ひどい学生ですよな。

就職して児童福祉課に配属となり、4年間そこで過

ごしました。自分の知識と経験のないことを日々痛感させられました。5年目から、学務課で就学援助の事務をすることになりました。かつての部署で見た名前、知った親の多くが就学援助を受けていることがわかり、妙に納得してしまいました。私が関わってきた人々というのは多分いろいろな問題をかかえているんだと思いますが、実にいろいろな人生があるんだなと感じています。誰もが、その人にとってよりよい生活を営んで少しでも多くの幸せを感じられればいいなと思います。行政からの援助ということで、私はその人々へのお手伝いができたような、できないようなといった9年間でした。

この4月からは公民館に異動になりました。心機一転というのはこのことをいうのでしょうか、人との間のある緊張感がずっと抜けたような思いで日々を送っています。公民館に来る人は皆やたらに明るくて眩しい気がします。社会教育について、この機会に多くのことを学びたいと考えていますが、でもまた福祉関係の部署で仕事ができればいいなと思っています。

あとがきの中で中地先生、金平先生の訃報を目にし、自分の老いや、自分にもやがて訪れるであろう死を考えると、特に子どもを持ってからは“自分が死んだらこの子はどうなるのだろう、せめてこの子が自立できるまでは生きていたい”と思うようになり、生に対する欲がでてきたように感じます。こんなことを考えているとなんか切なくなってしまいます。（後略）

(ニ)御無沙汰しております。TKUジャーナルいただきました。遠い所までありがとうございます。先生方の文章が家政大を懐かしく思い出したり、学生さんの卒論テーマを読んで忘れていた問題を考える機会にしたりしています（これは会費を納めなくてよいのでしょうか?）。

私の方は、毎日アフタヌーンティーを楽しむかたわら（日本人の方が多くでしょうか……）Highlandダンス（スコットランドの民謡に合わせて踊る独特のもの）を習ったり、現地の人に日本語を教えたりと、楽しんでおります。

5月に帰国が決まりました。あっというまの2年半でした。職場復帰です。また、生活保護法のはじめから勉強し直しになりそうです。電算も苦手なのです。勤務先は以前同様、中区役所（横浜市）です。日本に



帰りましてよろしくお願いたします。

(※)毎年TKUジャーナルをご丁寧に送って下さりありがとうございます。卒業してから5年経つと子どもをもつ友人もそろそろ現れてきました。先日、4ヶ月の子をもつ友人に会ったら“親の予定によって子どもの生活が決まる”と言って笑っていました。保育園で色々な家庭環境の子たちを見てきた私には、ひっかかる言葉でした。特に友人は働いているわけでもなく時間的・精神的にも余裕があるように見えるのでなおさらだったのです。つついアドバイスと言いつつ、私の意見を友人に聞かせてしまいました。でも自分の子ができたら思うようにはできないかもしれませんよね。まあ、その時はその時…(後略)

これらの手紙にコメントをつけることもないであろう。返事のなかった卒業生たちも、おそらく同じような思いでジャーナルを手にとっているものと、私たちは考えている。

#### おわりに一残された課題

さいごに、「残された課題」および「これからの展望」について述べておきたい。このような研究においては、「残された時間」そして「お金」ということになるのではなかろうか。雑誌を作ることも大変であるが、作成費用、及び郵送料をいかにして捻出するかということは実に頭の痛いところである。

今回は幸いにして、特別研究費の申請が認められたわけであるが、これからはどうであろうか。学園の広報紙や学科の機関紙などに便乗することも考えられるが、やはり研究室の独自性を打ち出していかななくては、意味がないといえよう。

私たちが参加している研究会に卒業生に来てもらうことも考えている。またいったんやめた人たちに再就職のための情報を伝えること、さらに卒業生の家庭における子育て支援、そしてこれから重大な問題となるであろう、老親の介助情報の提供など、まだまだやるべきことは沢山あるといえよう<sup>(9)</sup>。

関係ネットワークをもっと見通せるようにし、それと同時にまた、関係ネットワークによって構成メンバーが盲目的、専制的に引きずりまわされることが少なくなるようにすることは、社会学に課せられた中心課題の一つ

である<sup>(10)</sup>。

#### 註

- (1) N・エリアス(徳安彰 訳)「社会学とは何か—関係構造・ネットワーク形成・権力」法大出版局1994(原著は1970年刊) P109
- (2) その年度とテーマは次のようである。
  - (イ) 三角 同(他)「職業としての家政学」(S62~65)
  - (ロ) 保延成子(他)「福祉実践を考える」(H元~4)
  - (ハ) 川瀬八洲夫(他)「児童の権利の法制史的研究—子どもの生活・文化・教育との関わりにおいて」(H4~6)
  - (ニ) 本間真宏(他)「卒業生のネットワークづくりを考える—福祉研究室を中心に」(H6~8)
- (3) その年度とテーマは次のようである。
  - (イ) 保延成子「保育実習の現状と今後の課題—(2)—学生へのアンケートを中心として」全国保母養成協議会第17回研究大会発表(S53)
  - (ロ) 同「保育実習の現状と今後の課題—(4)—学部における保母養成のあり方を考える」全国保母養成協議会第25回研究大会発表(S61)
  - (ハ) 同「保育実習の現状と今後の課題—(5)—」全国保母養成協議会第26回研究大会発表(S62)
  - (ニ) 三角 同「保育実習の諸問題—「実習日誌」に書けなかったこと」日本保育学会第41回大会発表(S63)
  - (ホ) 三角 同(他)「福祉実践について—(1)—」本学紀要第28集所収(S63)
  - (ヘ) 保延成子「今後の保育者養成を考えるために」全国保母養成協議会第27回研究大会発表(S63)
  - (ト) 保延成子(他)「福祉実践について—(2)—」本学紀要第29集所収(H元)
  - (チ) 三角 同(他)「福祉実践について—(3)—」本学紀要第30集所収(H2)
  - (リ) 本間真宏(他)「福祉実践について—(4)—介護福祉士の養成養育を中心に—」本学紀要第31集所収(H3)
  - (ヌ) 三角 同(他)「福祉実践について—(5)—」本学紀要第33集所収(H5)
  - (ル) 保延成子「保育実習について—(2)—」日本保育学会第46回大会発表(H5)

卒業生のネットワークづくり

- (オ) 保延成子「保育実習の諸問題-(2)-実習日誌から考える」本学紀要第34集所収 (H6)
- (ウ) 保延成子・本間真宏「児童の権利の法制史的研究-(2)-子ども的人間的発達と福祉権に関連して」日本保育学会第47回大会発表 (H6)
- (カ) 本間真宏・保延成子「児童の権利の法制史的研究-(2)-子ども的人間的発達と福祉権に関連して」本学紀要第35集所収
- (4) その際、私たちが意図していたのはワープロを使用したことのない学生に何とか慣れさせようということであったが、ある程度は成功したといえよう。
- (5) 総理府編「女性の現状と施策-世界の中の日本の女性-」大蔵省印刷局 1994 p.65
- (6) 上野千鶴子編「主婦論争を読むⅠ・Ⅱ」勁草書房 1982
- (7) 脇田晴子・S, B, ハンレー編「ジェンダーの日本史(下)」東京大学出版会 1995 P679
- (8) 厚生省編「厚生白書51年版」大蔵省印刷局 1976 P75
- (9) 松本 康編「増殖するネットワーク」勁草書房 1995
- (10) 註(1)の文献 P118

付 記

本稿は第49回日本保育学会において発表したものに加筆・修正したものである。なお、本研究は平成6年度東京家政大学特別研究費によるものである。